

# グリーンデータブックあいち 2018 両生類編

島田知彦<sup>1)</sup>

両生類は、レッドデータブックあいち 2009 に全種リストが掲載されており、当時から現在までの修正を加えて本書に掲載した。

両生類は日本においては比較的種数の少ない生物群であるが、水辺環境の人為的な改変の影響を受けやすく、絶滅の懸念を持たれている種が少なくない。愛知県レッドリスト 2015 においても、当時県内に生息するとされていた 20 種のうち 13 種が掲載されており、特に有尾目（イモリ・サンショウウオ類）は生息する 7 種すべてが何らかの階級に該当すると評価されている。また無尾目（カエル類）も生息する 13 種中半分近くに及ぶ 6 種が、何らかの階級で掲載されている。一方レッドリストに掲載されていない 7 種の無尾目も、ニホンアマガエルやヌマガエルのように現時点ではほぼ絶滅のおそれがないと言えるものから、アズマヒキガエルやニホンアカガエルのように局所的な絶滅の懸念がもたれているものまで状況は様々であるが、いずれも水辺環境のよい指標となる。また、タゴガエルのように、分類学的な問題点があるために取扱いに注意を要するものもある。以上のような状況を踏まえ、両生類分野では本グリーンデータブックにおいて、レッドリスト未掲載の在来無尾目（カエル類）7 種すべてについて、本県レッドデータブックの体裁に準じた解説を加えることにした。記述の項目、内容等は B-3 頁の凡例の通りとした。

---

<sup>1)</sup> 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 愛知教育大学自然科学系（准教授）

・愛知県両生類目録

●有尾目 CAUDATA

◆サンショウウオ科 HYNOBIIIDAE

1. カスミサンショウウオ *Hynobius nebulosus* (Temminck et Schlegel, 1838)
2. ヒガシヒダサンショウウオ *Hynobius fossigenus* Okamiya, Sugawara, Nagano et Poyarkov, 2018
3. ヒダサンショウウオ *Hynobius kimurae* Dunn, 1923
4. コガタブチサンショウウオ *Hynobius stejnegeri* Dunn, 1923
5. ミカワサンショウウオ *Hynobius mikawaensis* Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada, 2017
6. ハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)

◆オオサンショウウオ科 CRYPTOBRANCHIDAE

7. オオサンショウウオ *Andrias japonicus* (Temminck, 1836)

◆イモリ科 SALAMANDRIDAE

8. アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster* (Boie, 1826)

●無尾目 ANURA

◆ヒキガエル科 BUFONIDAE

9. アズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus* Boulenger, 1883

◆アマガエル科 HYLIDAE

10. ニホンアマガエル *Hyla japonica* Günther, 1859

◆アカガエル科 RANIDAE

11. タゴガエル *Rana tagoi tagoi* Okada, 1928
12. ナガレタゴガエル *Rana sakuraii* Matsui et Matsui, 1990
13. ニホンアカガエル *Rana japonica* Boulenger, 1879
14. ヤマアカガエル *Rana ornativentris* Werner, 1903
15. ナゴヤダルマガエル *Pelophylax porosus brevipodus* (Ito, 1941)
16. トノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)
17. ツチガエル *Glandirana rugosa* (Temminck et Schlegel, 1838)
18. §ウシガエル *Lithobates catesbeianus* (Shaw, 1802)

◆ヌマガエル科 DICROGLOSSIDAE

19. ヌマガエル *Fejervarya kawamurai* (Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka et Sumida, 2011)

◆アオガエル科 RHACOPHORIDAE

20. シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1859)
21. モリアオガエル *Rhacophorus arboreus* (Okada et Kawano, 1924)
22. カジカガエル *Buergeria buergeri* (Temminck et Schlegel, 1838)

※和名、学名、配列は、「日本産爬虫両生類標準和名」(日本爬虫両棲類学会,2018)に準拠した。

「§」は移入種を示す。

## 【両生類の解説に関する凡例】

### 【分類群名等】

対象種の分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2018）に従った。

### 【評価区分】

対象種はすべて愛知県レッドリスト 2015 においてはリスト外とされた種であるが、レッドデータブックの体裁と合わせるため「記載なし」の文言を記述した。参考として環境省レッドリスト 2017 の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

### 【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は、原則として「日本産爬虫両生類標準和名」（日本爬虫両棲類学会，2018）に従った。

### 【形態】

対象種の形態の概要を記述し、写真を掲載した。

### 【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、愛知県絶滅危惧種等調査検討会両生類分野の 2013 年度（平成 25 年度）以降の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査または標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける 5 倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、確認地点を●印で表示した。得られたデータは、平成 24 年度以前の生息情報であっても同定の確実なものは使用したが、記録をさかのぼるのは 2001 年（平成 13 年）までとし、2000 年（平成 12 年）以前の生息情報は採用しなかった。

### 【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

### 【現在の生息状況】

対象種の愛知県における現在の生息状況について記述した。

### 【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

### 【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

### 【引用文献・関連文献】

記述中に引用した文献及び対象種の理解の助けになる一般的文献を、著者、発行年、表題、雑誌名、巻号、頁の順に掲載した。多くの種に関連する文献については、以下の略号を用いた。

西三河ツチ：島田知彦・坂部あい. 2014. 西三河平野部の水田におけるツチガエルの分布. 豊橋市自然史博物館研報 24: 7-15.

濃尾カエル：島田知彦・田上正隆・楠田哲士・藤谷武史・高木雅紀・河合敏雅・堀江真子・堀江俊介・波多野 順・廣瀬直人・池谷幸樹・国崎 亮・須田暁世・坂部あい. 2015. 濃尾平野に生息する水田棲カエル類の分布状況. 豊橋市自然史博物館研報 25: 1-11.

## ニホンアマガエル *Hyla japonica* Günther, 1859

### 【形態】

通常緑色の背面を持つ小型のカエル。みずかきの発達は弱い。指先には吸盤を持つ。背面には目立った隆起を持たない。鼻先から鼓膜後部にかけて黒色の斑紋を持つ。成体は25～40 mm程度。メスの方が大きい。オスは1対の鳴嚢を持つ。時として灰色や褐色に体色を変え、その際には背面に雲状紋が現れる。

### 【分布の概要】

国内では、北海道・本州・四国・九州とそれらの周辺の島嶼に広く分布している。同種とされるカエルは国外ではロシア、中国北部、朝鮮半島に分布する。

県内では、尾張地域、三河地域を問わず、全県的に平野部から山地までくまなく分布する。東三河山間部の情報が少ないが、確実に生息している。島嶼では佐久島にも生息する。

### 【生息地の環境／生態的特性】

水田や水路、ため池、湿地から、畑の天水桶や道路の水たまりのようなごく小さい水域まで様々な止水環境で繁殖する。卵は小規模な塊として多数の地点に産み付ける。オスは繁殖期以外の時期にもよく鳴き声を発するため、必ずしも鳴き声の聞かれた時期を繁殖期とすることはできないが、一般的な産卵期は4～7月。繁殖を終えた個体は水辺を離れ、周辺の林地や草地、民家の庭等で生活する。

### 【現在の生息状況】

身近なカエルで、県内のほとんどの水田で繁殖している他、住宅地や公園、学校等様々な環境に進出している。名古屋市内に孤立して点在する水田にあっても唯一のカエルとして生き残っている場合がある。その一方で、山地の林道で姿を見かけることもあり、幅広い環境に適応した種と言える。

### 【保全上の留意点】

現時点では県内の個体群に減少傾向は認められず、保全上特段留意すべき点はない。指先に吸盤を持ち、人工構造物を登攀する能力を持つことや、他のカエルに比べて乾燥に強いこと、繁殖期以外の時期には産卵地を離れ、周囲の樹木等に分散して暮らすことなどの点が、都市で孤立した水田でも生活できる要素として寄与していることが考えられる。

### 【特記事項】

本種に関しては西日本産と東日本産でミトコンドリアDNAおよび核DNAに著しい差異があることが知られており、別種レベルで分化しているとの指摘もある (Dufresnes et al., 2016) が、現時点では分子遺伝学的観点以外の検討がなされておらず、分類学的措置は取られていない。本県の個体群は東日本産の系統に属する。

### 【引用文献・関連文献】

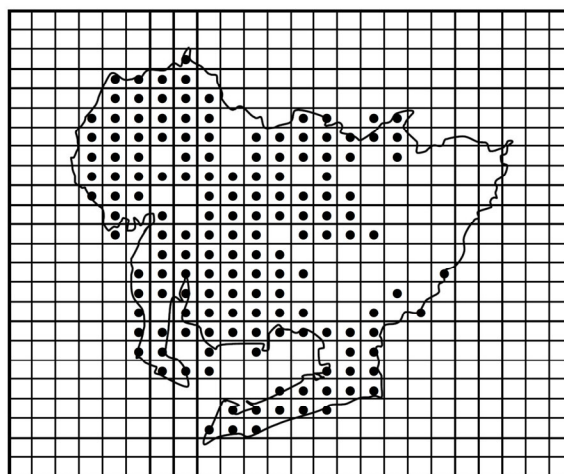
Dufresnes C., S. N. Litvinchuk, A. Borzée, Y. Jang, J.-T. Li, I. Miura, N. Perrin, and M. Stöck. 2016. Phylogeography reveals an ancient cryptic radiation in East-Asian tree frogs (*Hyla japonica* group) and complex relationships between continental and island lineages. *BMC Evolutionary Biology* 16: 253.

西三河ツチ、濃尾カエル



新城市，島田知彦 撮影

県内分布図



アズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus* Boulenger, 1883

【形態】

褐色の背面を持つ大型のカエル。全身にいぼ状突起を持つ。鼓膜の後ろには大きく細長い耳腺を持ち、毒液を分泌する。成体の頭胴長は本県ではおおよそ110~140 mm程度。メスはオスよりやや大型。オス成体でも鳴嚢を持たない。

【分布の概要】

日本固有種ニホンヒキガエルに認められる2亜種のうち、主に東北日本に分布する亜種。青森県から近畿及び山陰までの範囲に生息する。北海道や伊豆大島の個体群は人為移入。本亜種の分布より西南側の本州、四国、九州には基亜種ニホンヒキガエルが生息する。

県内では、平野部から山地まで広く分布していたと考えられるが、現在平野部では著しく減少している。渥美半島にはまだ比較的良好に生き残っているが、知多半島では減少が著しい。

【生息地の環境／生態的特性】

ため池や水たまり、水田等の様々な止水環境で繁殖する。繁殖は比較的短期間に集中し、多くの個体が集まって紐状の長い卵塊を産む。本県域の低標高地では通常2~3月に繁殖するが、高標高地では4月までずれ込む。繁殖を終えた個体は水辺を離れ、周辺の林地で生活する。

【現在の生息状況】

かつては市街部でも普通に生息していた種であり、名古屋市内でも多くの目視情報が得られているが、ここ十年ほどで見られなくなった地点が多い(浅香他, 2017)。公園緑地ではまだ残存している個体群があるが、最近急激に数が減ったり、個体群が消滅した地点も少なくない。一方、県内山地域においては本種の生息地点は近年でも多く知られている。県レッドリストにおいてはこうした現状を考慮し、現時点では県レベルで絶滅が危ぶまれる状況にはないと判断しているが、平野部における減少傾向は顕著で、その動向には十分注意する必要がある。

【保全上の留意点】

ヒキガエルは成体になると大型で乾燥に強く、寿命も長い。幼生から変態したばかりの幼体はきわめて小型で乾燥に弱く、自然界での死亡率も高い。こうした生物の保全にあたっては、幼齢期の死亡率の低減が有効であると考えられ、幼体の成長に適した湿潤な林地の確保や、繁殖地と林地の間の移動経路の確保等に留意する必要がある。また、アライグマやウシガエル等、外来の捕食者による捕食も考えられるため、捕食者の侵入防止や駆除にも留意する必要がある。県内では名古屋市レッドリストにおいて絶滅危惧II類と評価されている。

【特記事項】

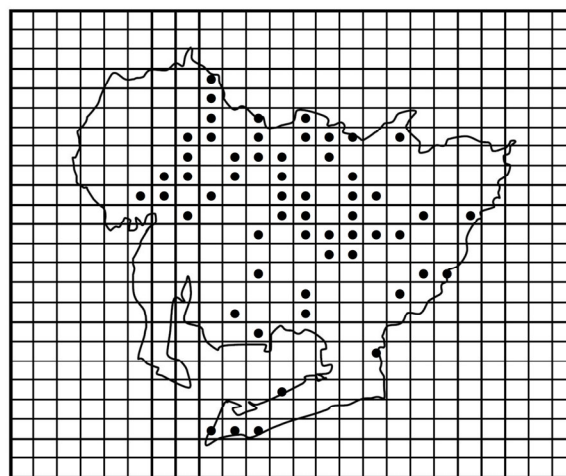
名古屋市内では西日本産亜種ニホンヒキガエルの遺伝型を持つ幼生が見つかっており、分布域からみて人為的な移入の可能性が高い(寺本・島田, 未発表)。見つかった個体が幼生であったことから、既に繁殖が行われている可能性もあり、留意が必要である。

【引用文献・関連文献】

浅香智也・寺本匡寛・島田知彦. 2017. アンケート調査に基づく名古屋市内のアズマヒキガエルの分布変遷. 爬虫両棲類学会報 2017: 164-171.



県内分布図



(執筆者 島田 知彦)

## ニホンアカガエル *Rana japonica* Boulenger, 1879

### 【形態】

褐色の背面をした中型のカエル。みずかきはよく発達し、指先には吸盤がない。左右の背側線以外には背面に目立った隆起を持たない。背側線は眼の後縁から体の後端まで一直線に走り、これが外側に折れ曲がるヤマアカガエルと区別できる。鼻先から鼓膜後部にかけて黒色の斑紋を持つ。成体は40~60 mm程度。メスの方が大きい。オスは成体であっても鳴嚢を持たない。

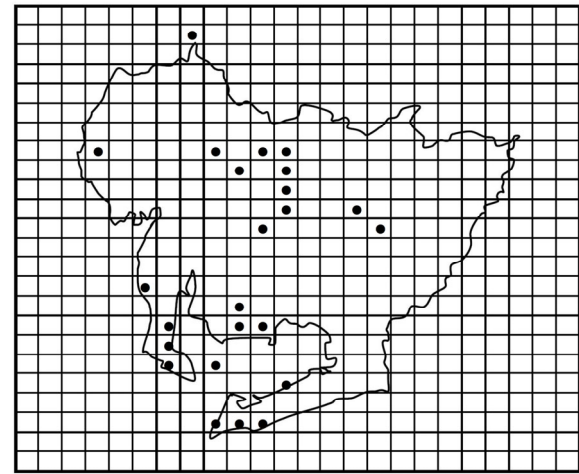


### 【分布の概要】

日本固有種。本州・四国・九州とそれらの周辺の一部の島嶼に分布しているが、本州中央部の高地域には分布しない。

県内でも高標高域からは確実な記録が少なく、もともと丘陵域から平野域にかけて分布していたと考えられるが、下に述べるように平野部の個体群は壊滅的な状態にある。尾張地域では知多半島に多くの個体群がある以外は、丘陵地等に散在する個体群があるのみである。三河地域では平野部に近い丘陵地に比較的まとまった個体群がある他、渥美半島にも生息する。島嶼部では佐久島にも生息する。

県内分布図



### 【生息地の環境／生態的特性】

水田やため池、湿地の浅い水域で繁殖する。繁殖期は地域や年によって大きくばらつくが、本県ではおおむね1月末から3月にかけて。産卵は比較的長期にわたって見られるが、その期間中に連続的に産卵が行われるのではなく、温かい雨の日等に多くの個体が集中して産卵する。気象条件がよければ日中でも盛んに産卵する。繁殖を終えた個体は水辺を離れ、周辺の林地や草地で生活する。

### 【現在の生息状況】

かつて広く生息していたと考えられる平野部の個体群はほとんど消滅している。一方、丘陵地にあるのは、ため池や水田の周辺でそれなりに生き残っており、繁殖状況をモニタリングしている施設もある。県レッドリストにおいてはこうした現状を考慮し、現時点では県レベルで絶滅が危ぶまれる状況にはないと判断してきたが、同じく平野部における減少の著しいシュレーゲルアオガエルやアズマヒキガエルでは高標高域に比較的高密度の集団の存在が期待できるのに対し、元々高標高域に生息しない本種の状況は、より危険度が高いと言え、その動向には注意が必要がある。県内でも名古屋市レッドリストにおいて絶滅危惧IB類、岡崎市のレッドリストにおいては絶滅危惧II類と評価されている。

### 【保全上の留意点】

水田の導水前の早春に産卵するため、その時期に繁殖に適した浅い水域が存在し、しかもその水域が幼生が変態するまで持続することが、個体群存続の必須条件となる。また、本種は繁殖後は林地周辺で生活するため、繁殖場と林地の間の環境の連続性を確保する必要もある。

### 【特記事項】

本種に関しては本県の古い時代の記録には、高標高域（例えば豊根村、設楽町、旧稲武町等）における本種の記述が数多く見られるが、状況的にヤマアカガエルとの区別が正確になされているか否かについて疑問が持たれ、本稿の執筆にあたってはこれらを採用しなかった。

(執筆者 島田 知彦)

## タゴガエル *Rana tagoi* Okada, 1928

### 【形態】

褐色の背面を持つ中型のカエル。みずかきの発達は弱い。指先には吸盤がないが、先端部がやや膨らむ。左右の背側線以外には背面に目立った隆起を持たない。あごの下には暗色の微細な斑点をそなえ、これを持たない他のアカガエル類と区別できる。鼻先から鼓膜後部にかけて黒色の斑紋を持つ。体サイズは本県域では 40～50 mm 内外の個体が多い。雌雄のサイズ差はない。オスは 1 対の鳴嚢を持つ。



### 【分布の概要】

日本固有種。本州・四国・九州とそれらの周辺の一部の島嶼に分布している。

県内では、丘陵地から山地にかけて広く分布しているが、渥美、知多半島からは記録がない。

### 【生息地の環境／生態的特性】

産卵は溪流近くの伏流水中で行われる。繁殖は本県低標高域で 4 月上旬～5 月上旬、高標高域で 5 月上旬～下旬程度。卵黄の大きな卵を産み、孵化した幼生は採餌せずに卵黄だけを栄養として変態する。繁殖を終えた個体は水辺を離れ、周辺の森林で生活する。

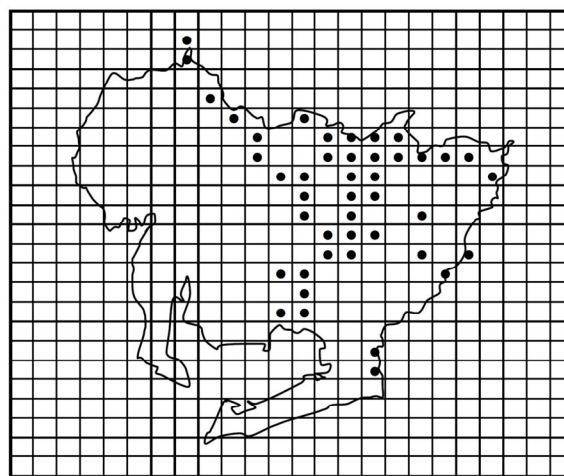
### 【現在の生息状況】

山地域の沢沿いではごく普通。

### 【保全上の留意点】

現時点では県内の個体群に減少傾向は認められない。ただ、砂防ダム建設や森林伐採等に伴う沢沿いの環境変化が減少を招く可能性があり、生息地でそうした事業を行う際には留意する必要がある。

県内分布図



### 【特記事項】

2014 年、従来タゴガエルとされていたカエルの中から、長野県下伊那郡根羽村を基準産地とする新種ネバタゴガエルが記載された (Ryuzaki et al., 2014)。記載論文によれば、この種はタゴガエルより染色体数が多く、繁殖音の周波数が高いことで区別できるが、形態的な差異は未知である。同論文には愛知県下のネバタゴガエルの産地として豊根村、設楽町、足助町 (現豊田市) が挙げられている。これを受けて県内のタゴガエル類の種帰属を再検討した島田他 (2016) によれば、東三河から西三河の大部分の個体群は核型、鳴き声ともにネバタゴガエルと同定できるが、豊田市北部から瀬戸市にかけての地域にはタゴガエルの核型 (26 本) とネバタゴガエルの核型 (28 本)、およびその中間 (27 本) の個体が同所的に出現し、3 者の間には分子遺伝学的な差異が検出できなかった。またこの地域ではネバタゴガエルに近い音声からタゴガエルに近い音声まで様々な記録が得られた。さらに北方の犬山、春日井の個体群は、染色体数は 26 本であるが、やはりネバタゴガエル様の音声も聞かれ、どちらの種に同定すべきか判断できなかった。以上のように、県下のタゴガエル類の状況は複雑で、少なくとも 2 つの種が明確な生殖隔離を伴って存在する様子は確認できていない。この問題が解決するまでは、県内における両種の保全上の捉え方を定めることは不可能と判断され、そのため本県レッドリストでは、ネバタゴガエルには触れていない。

### 【引用文献・関連文献】

Ryuzaki et al., 2014. A new brown frog of the genus *Rana* from Japan (Anura: Ranidae) revealed by cytological and bioacoustic studies. *Alytes* 31: 49-58.

島田知彦・山田哲也・江頭幸士郎, 2016. 愛知県産タゴガエル類の種帰属について. *爬虫両棲類学会報* 2016(1): 89.

(執筆者 島田 知彦)

トノサマガエル *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)

【形態】

緑色や褐色の背面に、多数の黒斑を有する大型のカエル。みずかきはよく発達し、指先には吸盤を持たない。明瞭な背側線隆起を持ち、その間にやや長い不規則な隆条が並ぶ。明色の背中線を持つ。背面の斑紋は成体では互いに連結する。成体は60~90 mm程度。メスの方が大きい。オスは1対の鳴嚢を持つ。同所的に生息する近縁種のナゴヤダルマガエルと比べて後肢が長いこと等の特徴で区別できる。

【分布の概要】

国内では、本州（関東地方から仙台平野を除く）、四国、九州とそれらの周辺の一部の島嶼に分布している。北海道の一部には人為移入。同種とされるカエルは国外ではロシア沿海州、中国北部、朝鮮半島に分布する。

県内では、尾張地域、三河地域を問わず、市街地を除いて全域に分布する。東三河山間部の情報が少ないが、確実に生息している。

【生息地の環境／生態的特性】

水田やため池で繁殖する。繁殖期は本来4月下旬から5月中旬にかけてだが、水田での繁殖開始は田植えのための導水以降になる場合が多く、導水が遅い場合には産卵開始が5月下旬までずれ込む場合もある。繁殖を終えた個体は水辺からかなり広く分散し、住宅地の庭や、山中の林道で成体を見かけることもある。

【現在の生息状況】

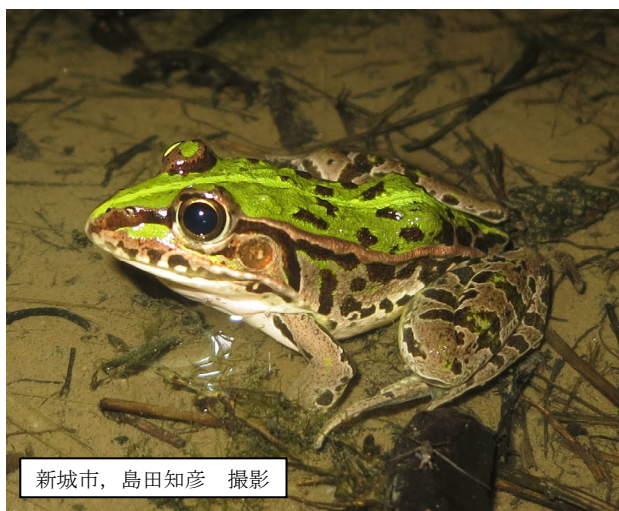
県下の平地の水田では総じてあまり密度は高くないが、大きな分布の空白はなく、全域に生息している。もともと名古屋近郊では近縁種のナゴヤダルマガエルの方が普通種で、トノサマガエルの方が少なかったといい（伊藤，1941）、現在でも尾張、三河の低平地では、本種よりナゴヤダルマガエルの方が優勢である地点が少なくない。他方、山あいの水田や水路では、トノサマガエルがきわめて高密度で生息している地点が多い。河川においても、河口部近くの下流域から、溪流と呼べるような上流部まで、様々な環境で生息する。

【保全上の留意点】

本種は環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種として掲載されているが、愛知県下では前項に述べたような状況を踏まえると絶滅が危惧される状況にはない。ただ、局所的に見ると圃場整備等の影響を受けて減少している地域も少なくない。本種の繁殖は水田の導水とともに始まることが多いが、導水時期が遅い場合繁殖に支障が出るのが考えられる。また本種の幼生はかなり大型になり、変態までに時間を要するため、導水時期が遅いと中干しまでに変態を終えられずに幼生が死滅することになる。水田で繁殖する個体群では、導水から中干しまでの湛水期に幼生の発生を終えられるか否かが死活問題となる。水田において本種を保全するためには、導水を比較的早い時期に行ったり、中干し時の幼生の避難場所を確保したりする等の対策が考えられる。県内では名古屋市レッドリストにおいて絶滅危惧II類、岡崎市のレッドリストにおいて情報不足種と評価されている。

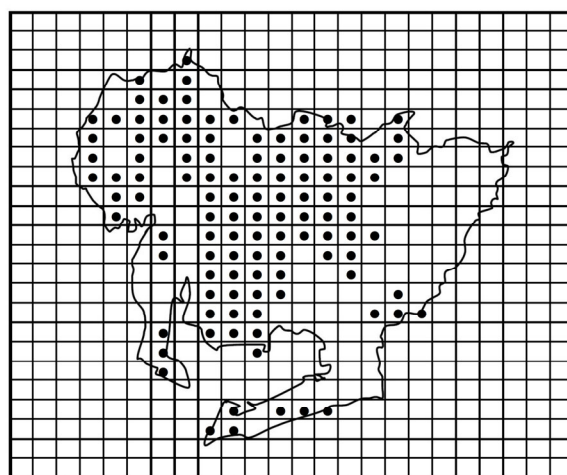
【引用文献・関連文献】

伊藤龍，1941. トノサマガエルの二型（第一報）. 名古屋生物学会記録8: 79-87.  
西三河ツチ、濃尾カエル



新城市，島田知彦 撮影

県内分布図



(執筆者 島田 知彦)



ヌマガエル *Fejervarya kawamurai* Djong et al. 2011

【形態】

明褐色の背面に暗褐色の斑紋を持つ小型のカエル。みずかきの発達は弱い。指先には吸盤を持たない。背面には不規則な隆起が散在する。成体は30～50 mm程度。メスの方が大きい。オスは1対の鳴嚢を持つ。一見ツチガエルに似るがV字状の斑紋が左右の上眼瞼を結んでいる点や、腹面が白くなめらかで顆粒や斑紋がないこと等で識別される。時として白い背中線を持つことがある。



武豊町，島田知彦 撮影

【分布の概要】

国内では、本州太平洋側の関東以西と四国、九州、先島諸島を除く南西諸島。関東地方の個体は国内移入とされている。国外では台湾、中国中～北部に分布する。県内では平地域の水田に広く生息しているが、丘陵地では少なく、山間部にはほとんど分布しない。

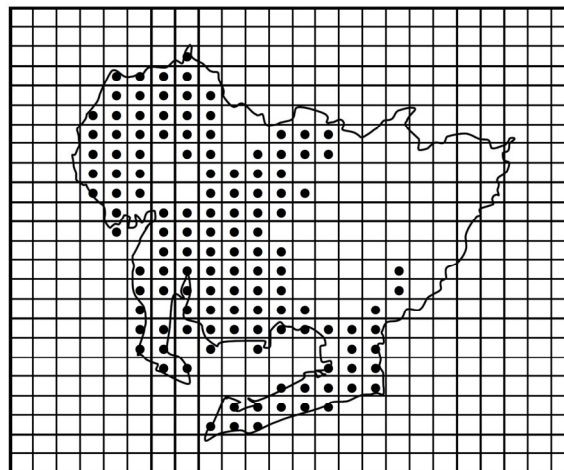
【生息地の環境／生態的特性】

水田や湿地を好んで棲む。繁殖期は5月～8月と長期にわたり、メスはその期間中不定期に何度も産卵することができる(志知他, 1988)。また中干し後の産卵でも落水までに変態を完了することができる(島田他, 2013)。以上のような特性は乾田化された水田環境で生き残るうえで有利であると思われ、近年分布を拡げる傾向にある。繁殖を終えた個体は水辺周辺の草地等に棲むが、あまり水場から離れた位置には進出しない。

【現在の生息状況】

県内平野部のほとんどの水田で繁殖しているが、丘陵地、山地には生息しない。

県内分布図



【保全上の留意点】

現時点では県内の個体群に減少傾向は認められず、保全上特段留意すべき点はない。多くの地点でニホンアマガエルやトノサマガエルと共存するが、本種の幼生が高密度で見られる水田はそれらの他種の幼生が少ないものに限られる傾向があり(Noha and Shimada, 2017)、繁殖開始期の遅い本種の卵が、先に産卵する他種の幼生に捕食されることがその一因となっている可能性が指摘されている(Noha et al., 2018)。

【特記事項】

本種はかつて東アジア、東南アジアに広域分布する種とされていたが、近年細分化され、日本産のヌマガエルを含むグループは新種として記載された。

【引用文献・関連文献】

- 志知尚美・芹沢孝子・芹沢俊介. 1988. 愛知県刈谷市におけるヌマガエルの成長と卵巣の発達. 爬虫両棲類学雑誌 12: 95-101.  
島田知彦・今村彰生・大西信弘. 2013. 水田棲カエル類5種の幼生フェノロジー. 爬虫両棲類学会報 2013: 77-85.  
Noha, K. and T. Shimada. 2017. Evaluation of factors affecting the larval density of *Fejervarya kawamurai* in Japanese paddy fields, especially focusing on the existence of other anuran larvae. Current Herpetology 36: 87-97.  
Noha, K. S. Toyoda, T. Takai, and T. Shimada. 2018. Why are larval *Fejervarya kawamurai* scarce in the paddies where larvae of other frogs are abundant? Experimental insight. Current Herpetology 37: 30-39.  
西三河ツチ、濃尾カエル

(執筆者 島田 知彦)

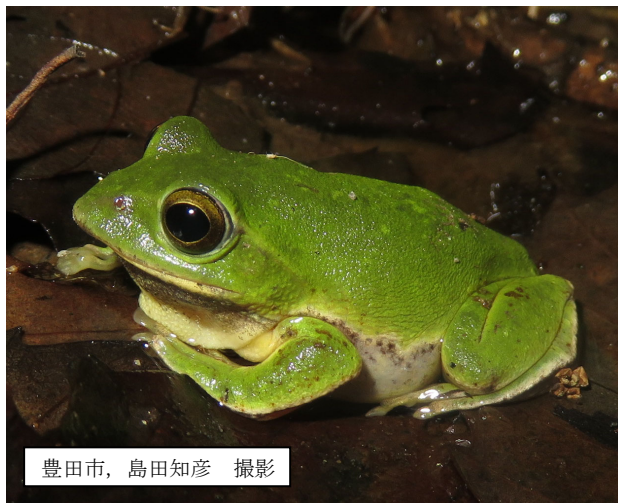
シュレーゲルアオガエル *Rhacophorus schlegelii* (Günther, 1858)

【形態】

緑色の背面を持つ中型のカエル。黄色の細点が散在する個体もいるが、モリアオガエルのような褐色斑紋は出現しない。みずかきは比較的よく発達し、指先には吸盤を持つ。成体のオスは30~40 mm、メスは40~50 mmほどで、メスはオスより著しく大きい。オスは1対の鳴嚢を持つ。

【分布の概要】

日本固有種で、本州、四国、九州とその周辺の島嶼に生息する。県内の平野域ではほとんど見られないが、丘陵地、山地には広く分布する。東三河山間部の情報が少ないが、確実に生息している。知多、渥美半島にも多産地がある。島嶼部としては佐久島にも生息する。



豊田市, 島田知彦 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

県内の低標高地では4~5月、高標高地では5~6月頃に繁殖する。産卵は水田や湿地で行われ、水辺に近い畦等の浅い土中にクリーム色の泡状の卵塊を産む。繁殖を終えた成体は樹林地に移動して樹上生活を送るが、越冬のためには樹木を降り、繁殖地周辺の土中に潜って越冬する。

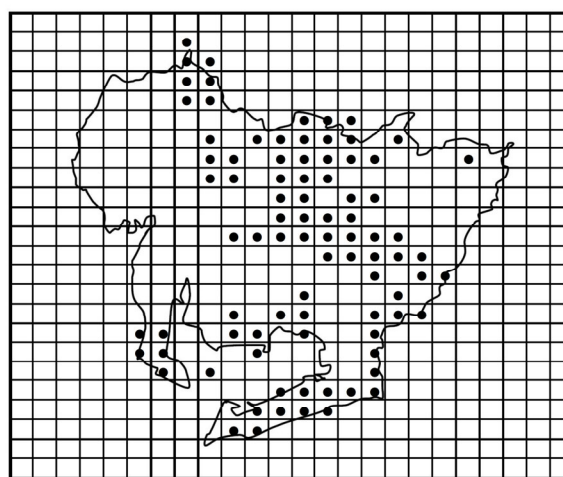
【現在の生息状況】

平野部においては著しい減少傾向にあるが、丘陵地、山地においては現在でもきわめて高密度で生息している地点が多い。

【保全上の留意点】

平野部における減少傾向は明らかではあるが、丘陵地、山地ではごく普通に生息しており、県レベルでの絶滅が危惧される状況にはない。本種は変態後樹林に移動して樹上生活をするため、繁殖地と林地の間に若齢幼体でも移動できるような環境の連続性があることが必要である。また、産卵には湿潤な水辺環境が必要なので、水田の場合には繁殖期に湛水されているか、あるいは湛水がなくても産卵できるような湿田であることが重要である。県内では名古屋市レッドデータブックにおいて絶滅危惧 IA 類と評価されている。

県内分布図



【関連文献】

西三河ツチ、濃尾カエル

(執筆者 島田 知彦)